38
光村
小国217

垣内松三 著

教育學部
資料室

友だち

しんこくご 二年下

教科書文庫
6
810
34-1950
0130449801

文部省検定済教科書

小KC
Mi65

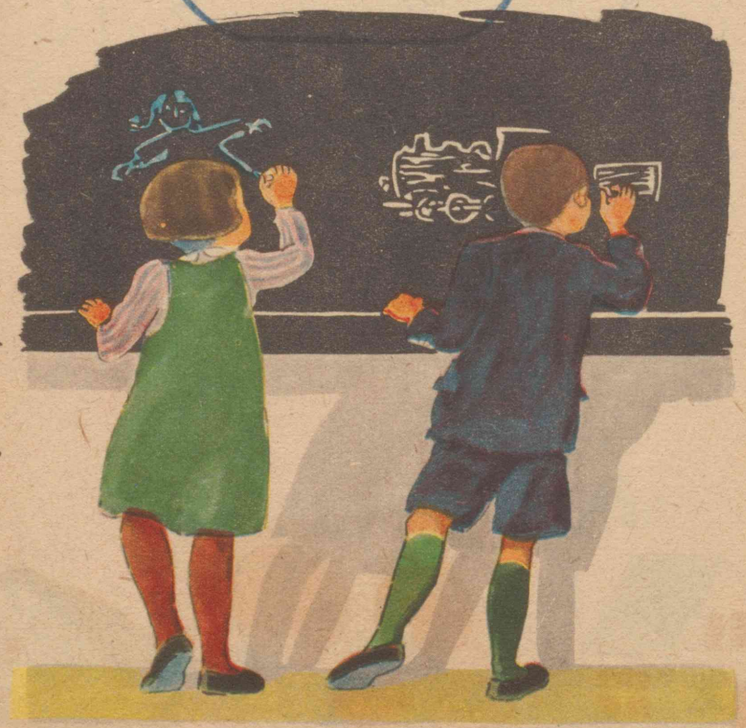
60260
教科書文庫
6
810
34-1949
01304
49801

寄贈
教科書文庫
6
810
34-1950
0130449801
広島大学図書
0130449801

友だち

しんこくご　二年　下

廣島大學
教育學部圖書



昭和二十四年十月十日
文部省検定済
小学校国語科用

中央図書館

指導者のために

(一) この本は、上・中巻の後を受けて、集団的・都市的生活に取材し、社会的意識を次第に高めながら、一年以來全巻を貫く人物によって、更に向上した言語生活の姿を描いた。国語学習における諸作業が、社会的要求に適応しながら興味のうちに有機的発展的に行われるように努めた。

(二) この本の内容は、児童の社会的生活を季節の推移によって統一してあるが、次の三つの題目に分れている。

一、友だち
友人・学級・学校の関係に取材して、生活文や言語表現に関する諸作業を提出した。集団的生活意識を高めながら表現力を養い、社会の要求に適応する言語能力の展開を図ることにした。

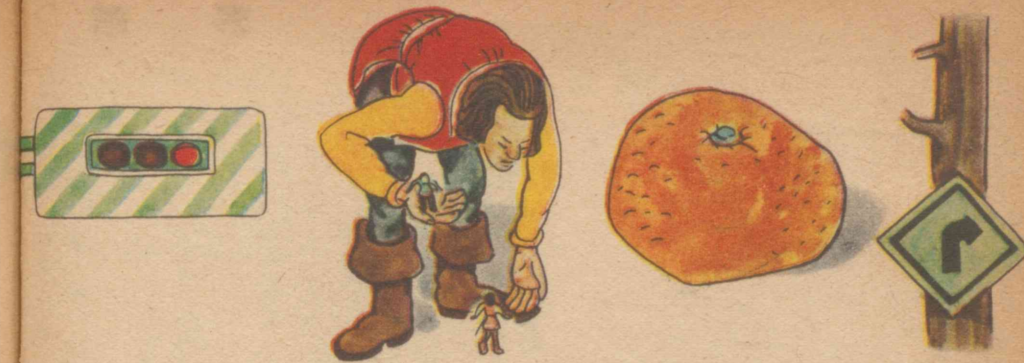
二、わたくしたちの町
都市的生活に取材して生活文・詩・物語等を提出した。共同作業による工作の設計に始まり、社会生活に対する自覚へと導きながら言語生活を発展させると共に、命名の機能等にも留意することにした。

三、たのしい日
学校と町の人々との関係、春を迎える希望等を主題として、生活文・詩・劇等を提出した。更に社会的意識を高めながら、自然や人生に対する新鮮な感覚を養い、正しい言語態度を確立することにした。

(三) この本に提出した新出語は一五五語で、毎頁の新語率は二・〇一語である。学習の手引・新語表・新字表を掲げて使用上の便を図ると共に片かなの習熟にも留意した。

(四) この本では都市的生活が主となっているから、各地域の児童の学習のために、さし絵は重要な位置を占めるので指導上充分留意してほしい。

(五) この本の使用期間は大体一月から三月までを目標として、大題目を平均一ヶ月宛としたが、それを固執する必要はない。地方の実情に即し、児童の個人差を考慮して有効に活用されたい。

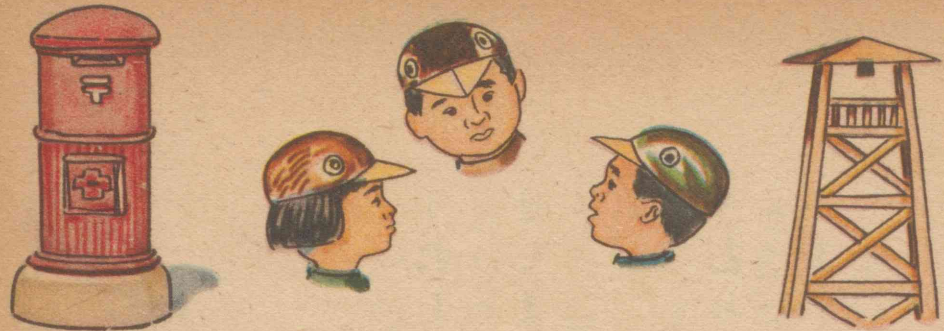


もくろく

一　友だち……4
(一)　友だち
(二)　こくばん
(三)　なんてんの　実

二　わたくしたちの　町……31
(一)　わたくしたちの　町

広島大学図書
0130449801



(二)　町かど
(三)　みかん

三　たのしい　日……56
(一)　たのしい　日
(二)　つくし
(三)　春の　小鳥

学しゅうの　手びき
新しい　ことば
かん字

一　友だち

（一）　友だち

「うれしい　ことを　お知らせします。新しい　お友だちが　ひとり　ふえました。きむら　さだおさんと　いいます。」

と、先生が　おっしゃいました。

さだおさんは、少し　はずかしそうに　して　立って　いました。

「さだおさんは、東京から　この　町に　ひっこして　きたのです。町の　ようすも、学校の　ようすも　わからないので、ふじゆうだと　思います。お友だちも　いないので、さびしいと　思います。みんなで、しんせつに　して　あげましょうね。」

先生の　お話に、みんなは、

「はい。」「はい。」

と、元気に　こたえました。

新しい　お友だちを　むかえて、みんなは　よろこびました。さだおさんは、にっこりして　おじぎをしました。

よしこさんたちは、学校の　中を　あんないして　あげました。

まさおさんたちは、いっしょに　なかよく　あそんで　あげました。

さだおさんから、東京の話を　ききました。

さだおさんの　ことばは　たいへん　きれいでした。

まさおさんも　きれいな　ことばで　話を　したいと　思いました。

「きれいな　ことばを　使いましょう。」

みんなと　話しあいを　しました。

○

ひどい　ふぶきでした。
目も　あけられないほどでした。
よしこさんは、なきだしそうな　かおを　して　歩いて　いました。
――ふぶきなんかに　まけるものか。
まさおさんは　元気を　だして、よしこさんの　手を　ひいて　やりました。
ふぶきは　いっそう　ひどく　ふきつけて　きました。ふたりは　かおを　まっかに　して、足を　ふん

ばって　歩いて　いきました。
むこうから、雪まみれに　なって、かえって　くる　子どもが　ありました。
みると、さだおさんでした。
「さだおさん、おはよう。どうしたの。」
さだおさんは、
「ぼく、歩けないから、うちへ

かえろうかと　思って。」

と、なきそうな　声で　いいました。

「元気を　だして、ぼくたちと　いっしょに　いきましょう。」

まさおさんは、さだおさんの　べんとうを　もってやりました。

五年生の　人が　通りました。

「さあ、いきましょう。」

と　いって、さだおさんの　手を　ひいて　やりました。

た。さだおさんは、

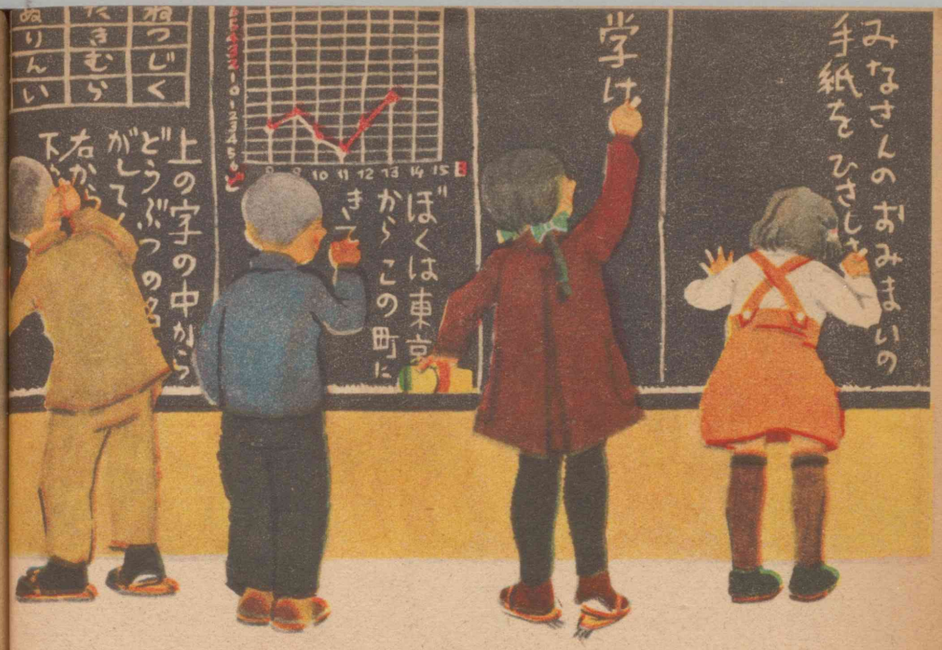
「ぼく、こんな　ひどい　ふぶき、はじめてだよ。」

と　いいました。

学校の　入口で、六年生の　人たちが　まって　いて　くれました。

「やあ、よく　きたね。」

と　いって、がいとうの　雪を　はらって　くれたり、ぼうしを　とって　くれたりしました。



（二）　こくばん

教室の　うしろの　かべに、大きな　こくばんが　かけてあります。

みんなで、いろいろな　こと を　自由に　書く、たのしいこくばんです。

お知らせ

みなさんの　おみまいの　手紙を、ひさしさんにもって　いって　あげました。ひさしさんは、たいへん　よろこんで　いました。だいぶ　よく　なったそうです。おばさんから、「みなさんに　よろしく。」といわれました。（よしこ）

おねがい

学げい会に、しばいを　したいと　思います。おもしろい　しばいの　本が　ありましたら、お知らせく

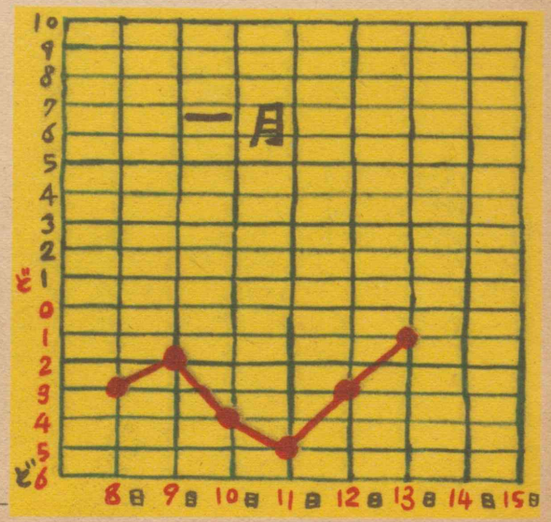
ださい。（みどり）

しらべた　こと

ぼくは、東京から　この　町に　きて、たいへん　寒いと　思いました。

まい朝、七時に　かんだんけいで　おんどを　しらべました。それで　表を　作って　みました。（さだお）

ことばさがし



さ	う	い	こ	か
や	ぎ	ぬ	た	ね
ろ	す	り	き	つ
じ	お	ん	む	じ
ほ	こ	い	ら	く

上の　字の　中から、どうぶつの名を　さがして　ください。

右から、左から、上から、下から、ななめから、どちらから　読んでも　かまいませんが、かならず、字が　つづくように　読んで　ください。

「きりぎりす」と　いうように、同じ　字を　なんかい　使っても　かまいません。この　中に、どうぶつが　たくさん　かくれて　います。（まさお）

さむい　朝

目が　さめた。
「おきようかな。」
「寒いな。もっと　ねて　いよう。」
「おきなければ　いけない。」
「ねて　いたい。」
「おきるのだ。」
ぼくは、
はねおきた。（けんきち）

南の　友だちから

はがきが、ピンで　とめて　あります。
きょ年、この　学校から　かわって　いった、さちこさんから　きた　はがきです。

みなさん、お元気ですか。
そちらは　雪が　ふって　いるでしょうね。
みなさんと　雪あそびを　した　ことを、なつかしく　思いだします。

こちらは　ちっとも　雪が　ふりません。

すいせんの　花は、とっくに　さきました。

うめの　花が、ちらほらさきはじめました。

みなさんも、おたよりをください。

さようなら。

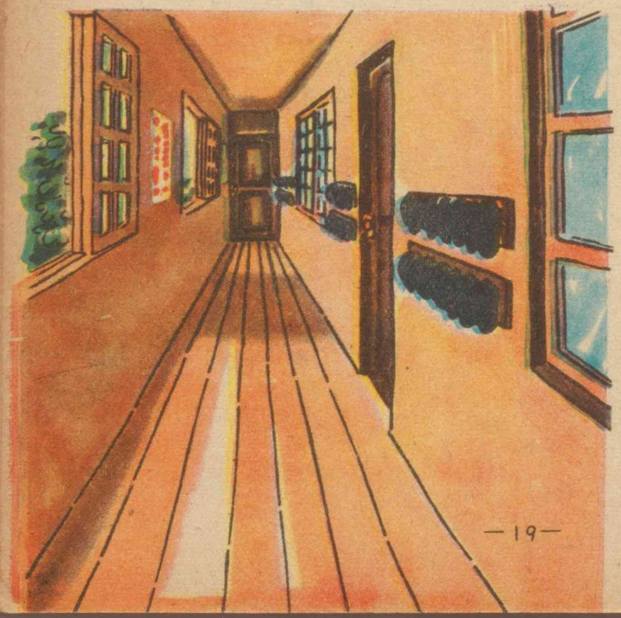
(三)　なんてんの　実

まさおさんたちの　組で、学校の　ことを　作文に　書きました。

○

長い　ろうかです。きれいに　光って　います。

ろうかの　北がわが　まど、



南がわが　教室に　なって　います。ぼうしかけに、ぼうしが　きちんと　かけて　あります。

かべに　ひょうごが　はって　あります。

「しずかに、さっさと、歩きましょう。」

わたくしは　ろうかを　通る　時、いつも　この　ひょうごを　思いだします。

○

げんかんの　ところに、えが　はりだして　あります。わたくしの　えも　はりだされました。

わたくしは　うれしくて、毎日　みに　いきます。

わたくしは　おかあさんを　かいたのです。

えの　よこに、六年生の　作った　かべしんぶんが　はって　あります。おもしろそうですが、まだ、よく　読めない　ところが　あります。

早く、読めるように　なりたいと　思います。

○

ぼくは　うさぎの　とうばんですから、けさ、早く　学校に　きました。

ぼくが　うさぎ小屋へ　いくと
うさぎは　かなあみに　かおを
くっつけて、はなを　ぴくぴくさ
せて　まって　いました。
えさを　やると、よろこんで　たべました。かわい
くて　たまりません。ぼくは、毎日、うさぎの　とう
ばんを　したいと　思います。

○

わたくしは、赤い　実の　ついた　なんてんを、う

ちから　もって　きました。教室の　本だなの　上に
かざって　おきました。
教室が　きれいに　なったように　思いました。
「まあ、きれい。」
友だちが　よろこんで　くれました。
先生も、よろこんで　ください。
ました。
まどから　光が　さして　います。
なんてんの　あたりが、いっそう

明かるいように　みえます。

○

本だなに、本が　きれいに　ならんで　います。

ぼくは、この　ごろ　本を　読むのが　すきに　なりました。

きのうから、ガリバーの　え本を　読みはじめました。

「ガリバーが　目を　さましました。

た。からだが　しばられて　います。

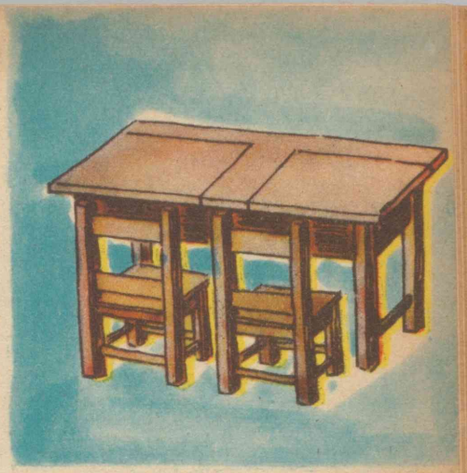
みると、小人たちが　たくさん　集まって、がやがや　さわいで　いました。」

ガリバーは　どうなるでしょう。

ぼくは、その　さきが　読みたくて　たまりません。

ガリバーの　え本は、上から　二ばんめの　たなにあります。赤い　表紙が、どの　本よりも、ぼくには　はっきり　みえます。

○

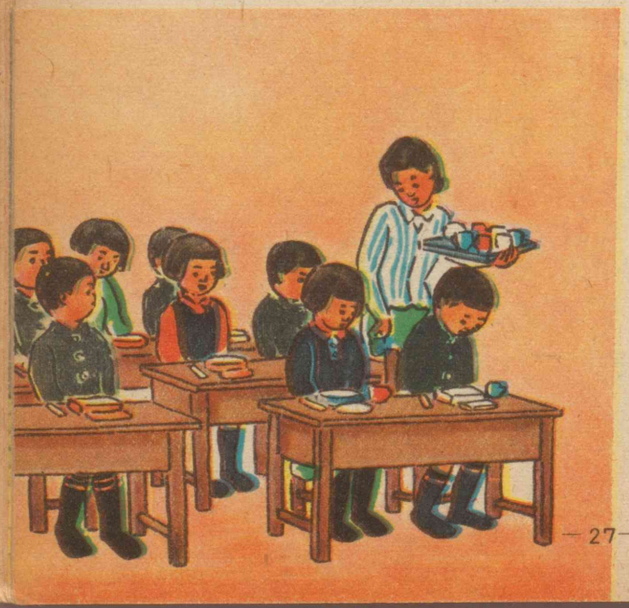


わたくしの　つくえは、前に、だれが
すわったのでしょう。
わたくしが　三年に　なったら、この
つくえに、だれが　すわるのでしょう。
わたくしは、この　つくえを　だいじに　しようと
思います。

○

ぼくは、きゅうしょくが　たのしみです。
きゅうしょくを　つくるのに、おかあさんたちが

おてつだいに　きます。
ぼくは、魚も　肉も　すきです。ねぎも　にんじん
も　食べられるように　なりました。
先生が　みんなに、きゅうし
ょくを　くばって　ください
す。
寒い　日に、あつい　きゅう
しょくを　いただくと、からだ
が　あたたかく　なります。



○

今、すなばこに「わたくしたちの　町」を　作って
います。
早く　作りあげたいと　思います。
わたくしは　としょかんを　作るのです。きのうは
家に　かえってからも、あつ紙を　切って　作りました。
まどには　セロハンを　はって、ガラスの　かわりに
しました。

○

作文を　とじて、文しゅうに　しました。
「この　文しゅうに、みんなで　名まえを　つけましょう。考えて　ください。」
と、先生が　おっしゃいました。
みんなで　いろいろ　話しあいましたが、いい　名まえが　みつかりません。先生が、「なんてんの　実」と　おつけに　なりました。
「なぜ、『なんてんの　実』と　つ

けたか、あててごらん。」

先生が　おっしゃいました。

「美しいからだと　思います。」

「雪に　まげないで、元気に　実を　つけるからだと思います。」

「そうです。それに、なんてんの　実は、みなさんの"ように、なかよく　手を　つないで　いますからね。」

先生が、なんてんの　実を　みながら　おっしゃい"ました。

二　わたくしたちの　町

(一)　わたくしたちの　町

教室の　すなばこは、今まで　どうぶつえんに　な"って　いました。あつ紙で　作った　いろいろな　ど"うぶつが、たくさん　いました。

こんどは　その　すなばこに、新しく　町を　作ることに　なりました。

すなを　ならして、一方を　おかに　しました。

「さあ、何から　はじめましょう。」

と、先生が　おっしゃいました。

「たてものを　作りましょう。」

「たてものの　ばしょを　きめましょう。」

みんなが　いろいろ　いいました。

「まず、道を　きめたら　どうでしょう。」

と、まさおさんが　いいました。

みんなが　さんせいしました。

「よく　考えましたね。では、道が　きまったら、何を　たてる　ことに　しましょうか。」

先生が　おっしゃいますと、

「駅です。」

と、ひさしさんが　まっさきに　いいました。

「役ばも　いります。」

と、よしこさんが　いいました。

学校、ゆうびんきょく、けいさつ、しょうぼうしょ、びょういん、としょかんなどと、みんなが いいました。

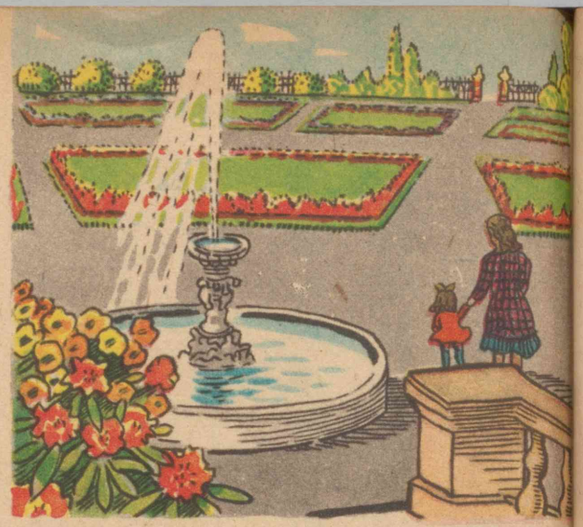
先生が、それを こくばんに お書きに なりました。さだおさんが、

「えいがかんが あったら いいと 思います。」

と いいましたので、みんなが さんせいしました。

「先生、こうえんは どうでしょう。」

みどりさんが いいました。



「こうえんは たてものでは ありませんが、だいじな ことに 気が つきましたね。」

と、先生が おっしゃいました。

たてものが きまったので、それを たてる ばしょを きめる ことに しました。

「駅は おかの 下の 方が いいだろう。」

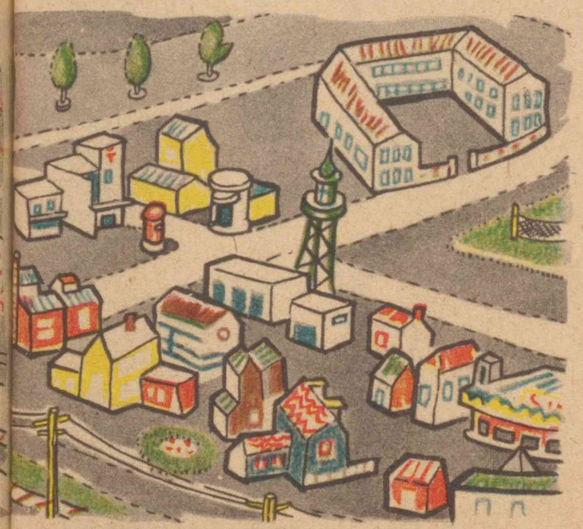
「おかの　上だと、きしゃが　のぼりにくいからね。」
「駅の　前から、まっすぐに　道を　つけましょう。」
「ひろい　道が　いいなあ。」
「おかの　中ほどに、学校を　たてたら　どう。」
「でも、よこの　道を　きめなければ。」
「そう、そう。やっぱり、道が　だいじね。」
「店の　多い　所は、駅の　近くに　しましょう。」
「家は　おかの　方が　いいね。」
「びょういんは、こうえんの　近くが　いいでしょう。」

「としょかんもね。」
「役ばは。」
「役ばは、町の　まん中あたりが　どうでしょう。」
「いい町が　できるね。ぼくも、こんな　町に　すんで　みたいなあ。」

たてものを　作る　ことに　なりました。
組わけを　して　作る　ことに　しました。
まさおさんたちは、駅を　作る　ことに　しました。

よしこさんたちは、役ばを　作る　ことに　しました。
ひさしさんたちは　ゆうびんきょく、さだおさんたち
は　びょういん、みどりさんたちは、こうえんを　作
る　ことに　しました。

あつ紙を　切ったり、色紙
を　はったり、クレヨンで
ぬったりして、いろいろ　く
ふうを　して　作りました。



毎日、少しずつ　作って
いきました。

新しい「わたくしたちの
町」が、新しい　道に　そって
だんだん　できあがって　い
きました。

だれかが、かわいい　ポス
トを　作って　きて、町かど

に　おきました。

まさおさんたちは　てつどうも　しきました。わり"ばしと　糸で、でんせんも　はりました。かわいい　シグナルも　作りました。

町に　名まえを　つける　ことに　しました。みんなで　考えて　きめる　ことに　しました。駅にも、通りにも、こうえんにも、名まえを　つけ"る　ことに　しました。

(二)　町かど

○

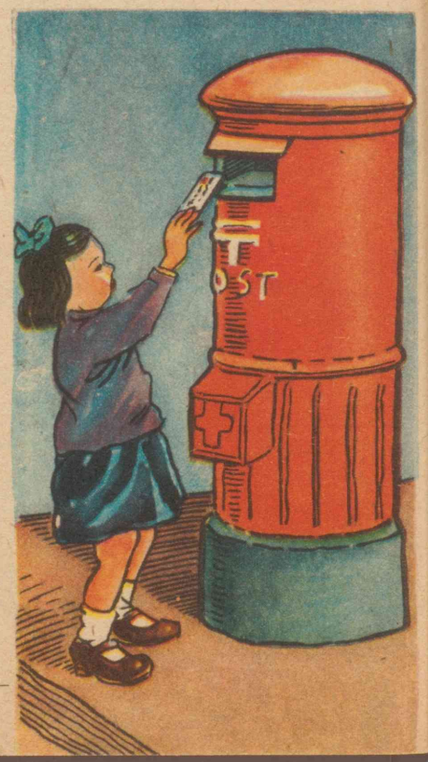
町かどの　ポスト。

わたしは、手紙を　そっと　なでて、

「では、いって　いらっしゃい。」

と　いって　入れた。

南の　友だちに　書いた　手紙。



○

こんこん、こな雪。
町かど、日ぐれ。

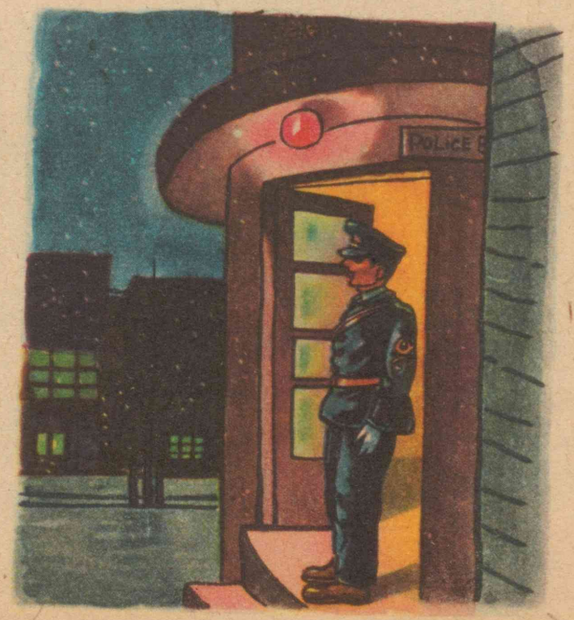
青い　光が、
「すすめ」と　いった。
人が　ぞろぞろ、
ぞろぞろ、通った。

赤い　光が
「とまれ」と　いった。
子いぬが　一ぴき
とまらず　かけた。

こんこん、こな雪。
町かど、日ぐれ。

○

こな雪が　ふって　いる。
夜ふけの　町かどに、
ぽっつりと　ついて　いる、
赤い　でんとう。
その　下に、
じっと　立って　いる　人の　かげ。
町を　守って　くださる　人。



○

つめたい　風が、
でんせんに　うなって　いる。
星の　空に、
黒く　そびえて　いる　火のみ
やぐら。
あの　上にも　人の　かげ。
四方に　目を　くばって、
夜ふけの　町を　守って　くださる　人。

○

トン　テン　カン。
まだ　くらいのに、
トン　テン　カン。
かじやの、仕事ばから、
トン　テン　カン。
朝の　おんがくが　おこって、
トン　テン　カン。
町が　目を　さます。

(三)　みかん

山の　だんだん畑に、みかんの　木が　たくさん
ならんで　いました。どの　木も、黄色に　なった
実を、重そうに　つけて　いました。
やわらかな　風が　ふくと、あまい　においが　そ"
こらじゅうに　流れました。
山の　ふもとの　川を、船が　ゆっくりと、のぼっ"

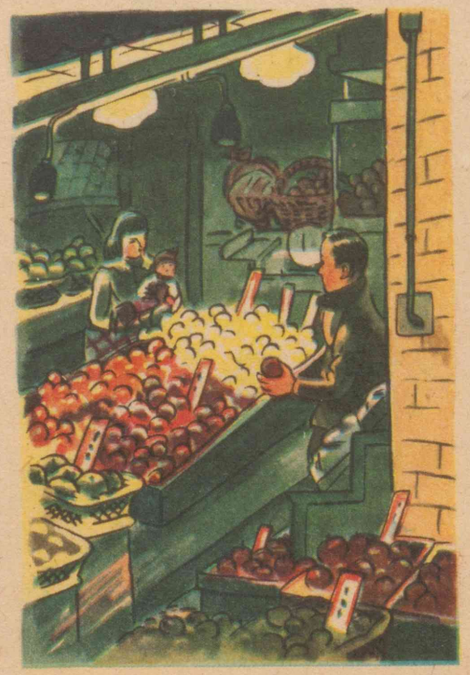
たり　くだったりして　いました。
川しもの　長い　てっきょうを、
きしゃが　ときどき　きてきを
ならして　通りました。
みかんとりの　うたに　まじって、チョキンチョキンと、はさみの　音が　きこえる　ころに　なりました。
「もう、そろそろ、この　山にも

おわかれだな。」
みかんの　実は、木の　えだで　話しあって　いました。
「わたしたちは　どこへ　送られて　いくのかしら。」
「どこまでも　いっしょだと　いいけれどね。」
「でも、大きさで　えりわけられたり、入れられたはこが　ちがったりすると、わかれわかれに　なって　しまうかも　しれないね。」
「なんでも、まだ　青い　うちに　もがれた　ものほ

ど、遠い　方へ　送られると　いう　ことだ。」
その　うちに、みかんの　実が、木から　はなれる
日が　やって　きました。
みかんは、ひと所に　集められて　えりわけられま
した。はこに　つめこまれて、どこかへ　はこびださ
れました。
はこの　中は　まっくらなので、みかんは　どこを
どう　通って　いるのか　わかりませんでした。
ギイと　なる　ろの　音や、ジャポンと　水の　は

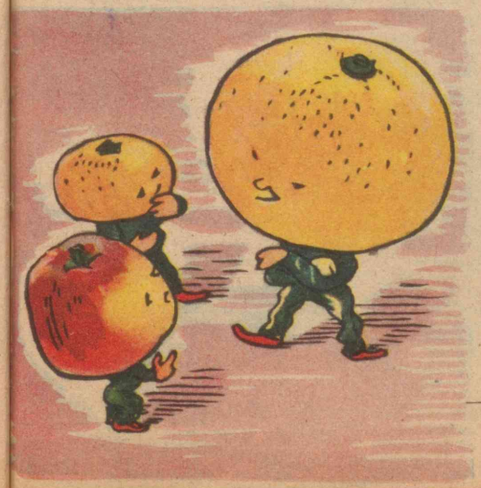
ねる　音を　きいて、船に　のって　いるのだと　思
いました。ゴウゴウと　いう　車の　ひびきや、ポー
と　なる　きてきの　音を　きいて、きしゃに　のっ
て　いるのだと　思いました。
みかんは、みかん山で　ながめて　いた　けしきの
中を、いつまでも　通って　いるような　心もちが
しました。
長い　たびを　つづけた　ある日、みかんは、きゅ
うに　明かるい　所に　だされました。

みると、でんとうの　下に、たくさんの　なかまが
きれいに　ならんで
いました。
そこは、くだもの屋の　店でした。
「わあ、寒いなあ。」
みかんは、思わず　首を　ちぢめて　しまいました。
外には、ちらちらと　雪が　ふって　いました。
みかんは　からだを　よせあって、「寒い、寒い。」と



口々に　いって　いました。
「そんなに　寒くも　ないのに。」
となりの　りんごが　わらって　いいました。
「いじわるの　りんごさんね。」
「あなたは　北の　国に　育って、寒さに　なれて
いるからでしょう。」
みかんは、がやがや　いいました。
「ね、なつみかんさん。あなたも　寒いでしょう。」
「うん。」

なつみかんは、むっつりと　うでを　組んで、目を
つぶったまま　へんじを　しました。
「そんなに　寒くは　ありませんね。」
りんごが　いいますと、なつみかんは　また、
「うん。」
と　いいました。
くだものたちは　おかしく　なって、
「ね、どっちなの。」
と　ききますと、やっぱり、



「うん。」
と　いいました。
みんなは、おなかを　かかえて　わらいました。
あまり　わらったので、みかんは、からだが　少し
あたたかく　なって　きたような　気が　しました。
「きれいな　みかんですね。」
どこかの　おばさんと　男の　子が、店に　はいって
て　きました。みかんたちは、きゅうに　しずかに
なって、その　方を　みました。

三　たのしい　日

(一)　たのしい　日

まさおさんの　学校では、ひなまつりの　日に、学げい会を　しました。

おとうさんや　おかあさんたちも　おまねきしました。

まさおさんの　うちからは、おかあさんが　いらっしゃいました。

おかあさんは、「おとうさん、おかあさんと　先生の会」の　とうばんに　なって　いるので、早くから　学校に　きて、てつだいを　して　くださいました。

よしこさんの　うちからは、おとうさんと　ねえさんが　おみえに　なりました。

みなさんに　みて　いただく　ために、教室には、みんなで　作った「わたくしたちの　町」や、文しゅう」などを　ならべて　おきました。しらべた　ことや、

えなども　はりだして　おきました。

たくさんの　人が、「わたくしたちの　町」の　まわりに　あつまって、ねっしんに　みて　くださいました。

「よく　考えて　作ったな。」

「ほんとに　よく

できて　いますね。」

と、ほめて　くださいました。

みんなは　うれしいと　思いました。

学げい会で、よしこさんたちは、「つくし」と　いう　歌を　歌いました。

まさおさんたちは、「春の　小鳥」と　いう　しばいを　しました。

おとうさんや　おかあさんは、にこにこして　みて　くださいました。

(二) つくし

つんつん、つくつく、
つくしが いった。
「春は まだかな、
のぞいて みよか。」
つくつく、つくしが

頭を だした。
だした 頭を、
春風 ふいた。

つんつん、つくつく、
つくしが のびた。
おかの 日あたり、
つくしが のびた。

(三) 春の 小鳥

でる 人

男の 小鳥
その 親鳥
かくれんぼする 小鳥たち
一、二、三は 男の小鳥
四、五、六は 女の小鳥
うぐいす

ところ 山おくの もりの 中

まくが あきます。

小鳥が、木の えだに こしかけています。おかあさんの 小鳥が、よそへ いく したくを して います。

小 鳥 おかあさん、早く かえって きてね。

親 鳥 はい、はい。ご用が すんだら、すぐ、かえって きますよ。

小 鳥 ぼく、何を して いようかな。

親鳥　歌の　おけいこは。

小鳥　そう、そう。歌の　おけいこを　して　いる　ことに　しょう。

親鳥　もう　すぐ、ふもとの　村へ　つれて　いって　あげますからね。しっかり　おけいこを　する　んですよ。

小鳥　うれしいなあ。

親鳥　では、おるすばんを　たのみますよ。

小鳥　いって　いらっしゃい。

おかあさんは、かごを　さげて　でかけます。

小鳥は　それを　み送って　いますが、歌の　けいこを　はじめます。

小鳥　るり　られ　ろれ、チッチッチッ。
　　さし　すせ　そせ、チッチッチッ。
　　はひ　ふへ　ふほ、チッチッチッ。

その時、「かくれんぼ　するもの、よっといで。」と、小鳥たちの　よぶ声が　します。

小鳥は、その　声の　方を　みます。

小鳥たちが、かたを　組んで　でて　きます。なんども　よびながら、
その　あたりを　ぐるぐる　まわります。

小鳥一　さあ、はじめよう。

小鳥四　じゃんけん　しましょう。

みんなで　じゃんけんを　します。五の　小鳥が　おにに　なります。
みんなが　かくれに　いきます。五の　小鳥が、「もう、いいかい。」
と　いいます。

「まあだだよ。」と、ほかの　小鳥の　声が　します。
小鳥が　木の　えだに　もたれて、だまって　みて　います。

その　うちに、「もう、いいよ。」と　いう
声が　します。
五の　小鳥が　あたりを　みます。えだに
もたれて　いる　小鳥に　気が　つきます。

小鳥五　あら、どうして　かくれ
んぼに　はいらなかった
の。

小鳥　ぼく、るすばんを　して
いるんだもの。

小鳥五　るすばんでも、この　あたりで　するんだから、
いいでしょう。

小　鳥　だって、おかあさんと　やくそくしたんだ。歌〃
の　おけいこを　して　いるって。

小鳥五　どんな　歌。

小　鳥　ぼく、まだ、口が　よく　まわらないから、口〃
を　うごかす　おけいこさ。

小鳥五　そんな　おけいこ　した　ことが　ないわ、わ〃
たし。

小　鳥　おかあさんに、毎日、教えて　いただいて　い〃
るんだ。どんな　ことばでも、はっきり　いえ〃
ないと、歌が　じょうずに　歌えないんだって。

小鳥五　そう。どんな　ことを　ならって　いるの。

小　鳥　いろいろ　あるんだよ。今、けいこして　いる〃
のは、るり　られ　ろれ、チッチッチッ。

小鳥五　るり　られ　れれ、——うまく　いえないわ。

小　鳥　こんなのも　あるよ。
きゃく　けきょ　きゃく、チッチッチッ。

小鳥五　きゃく　きゃく　きゃく、—あら、これも　む"
ずかしいわ。

そこへ、一の　小鳥が　でて　きます。つづいて、三、四の　小鳥が
でて　きます。

小鳥一　何を　して　いるの。

小鳥三　どうして　さがしに　こないのさ。

小鳥四　わたし、がまんして、しげみの　中で　まって
いたのよ。

小鳥五　そう、そう。かくれんぼの　ことを、すっかり

わすれて　いたわ。

ほかの　小鳥たちも、みんな　かえって　きます。

小鳥五　いま、とても　おもしろい　ことを　ならって
いたの。

小鳥六　なあに、おもしろい　ことって。

小鳥五　口を　うごかす　おけいこよ。きゃく　きゃく
きゃく。

小　鳥　そうじゃ　ないよ。きゃく　けきょ　きゃく。

小鳥一　なんだい、それは。

小鳥五　いって　ごらん。とても　むずかしいのよ。
小鳥一　きゃく　きゃく。きゃく　きゃく。――なあんだ。つまらないや、こんな　こと。さあ、かくれんぼしょう。
小鳥三　だけど、それ、おもしろいなあ。
小鳥五　もっと　あるのよ。ね、たくさん　いって。
小鳥　るり　られ　ろれ、チッチッチッ。
　ゆっくり　いえば、すぐ　できるよ。
小鳥四　るり　られ　ろれ、チッチッチッ。――おもしろ

いわ。
小鳥　さし　すせ　そせ、チッチッチッ。
小鳥六　さし　すせ　そせ、チッチッチッ。
小鳥一　よそう。そんな　こと　おぼえたって、なんにも　ならないよ。
小鳥五　だって、口が　よく　うごかないと、いろいろな　歌が　うまく　歌えないわ。
小鳥一　うまく　歌えなくても　かまわないよ。
遠くで、うぐいすの　歌う　声が　します。

小鳥六　あ、うぐいすさんよ。

小鳥三　ふもとの　村から　かえって
きたのだね。

小鳥たち　うぐいすさあん。

みんなで　よびます。

そこへ　うぐいすが　きます。

うぐいすは、みどり色の　マントを　きて
います。

小鳥五　おかえりなさい、うぐいすの

にいさん。

小鳥たち　おかえりなさい。

うぐいす　みなさん、ただいま。——ふもとの　町や　村に、
春が　きた　ことを　知らせて　きたよ。

小鳥四　うぐいすさんの　歌を　きいて、みんな　よろ〟
こんだでしょう。

小　鳥　まって　いたでしょうからね、春が　くるのを。

うぐいす　まって　いたとも。長い　冬だったからね。こ〟
んどは、きみたちが　ふもとへ　でかける　ば〟

んだよ。歌の　おけいこは　できたの。

小鳥五　わたし、あまり　うまく　歌えないわ。

小鳥六　わたしもよ。

小鳥一　歌えなくても　いけるでしょう。

うぐいす　それは　いけるさ。でも、歌が　じょうずだと、人にも　花にも　よろこばれるよ。それに、ふもとでは、みんなの　春の　歌を　ききたがって、まって　いるんだもの。

二の　小鳥が、うぐいすの　もって　いる　すみれの　花に　気が　つき

ます。

小鳥二　きれいだなあ、その　花。

小鳥六　まあ、かわいい　花ね。

うぐいす　すみれさ。春の　はじめに　さく　花だよ。

小鳥四　もう、こんな　花が　さいて　いるの。

小鳥五　早く　ふもとの　村へ　いって　みたいわ。

うぐいす　では、しっかり　歌の　おけいこを　してね。

みなさん、さようなら。

小鳥三　みんなで、うぐいすさんを　そこまで　送って

いこうよ。

小鳥二　それが　いい。

うぐいす　どうも　ありがとう。

小鳥たちが、うぐいすを　送って　いきます。

小鳥は　また　歌の　けいこを　はじめます。

その時、一の　小鳥が　走って　かえって　きます。

小鳥一　きみ、これから　ぼくにも　歌を　教えてね。

小　鳥　あ、いいとも。いっしょに　おかあさんに　教えて　もらおう。いつでも　おいでよ。

小鳥一　ありがとう。

一の　小鳥は　いきかけますが、また　もどって　きます。

小鳥一　なんだった、あれ。らり　るれ、らり　るれ。

小　鳥　るり　られ　ろれ、チッチッチッ。

小鳥一　そう、そう。るり　られ　ろれ　チッチッチッ。

一の　小鳥、大きな　声で　くりかえして　いいながら　いきます。

小鳥、かえって　くる　おかあさんを　みつけます。

小　鳥　おかあさん。

大きな　声で　さけびます。

「はあい、ただ今。」と おかあさんの 声が します。

小 鳥 おかあさん。早く ふもとに いきましょうよ。
みんな ぼくたちの くるのを まって いる
んですって。

小鳥が おかあさんの 方を みて、うれしそうに さけんで い
ます。

遠くで、また うぐいすの なく 声が します。

まくが しまります。

学しゅうの 手びき

一 友だち

あなたの 友だち・学きゅう・学校の ことを 考え
ながら、学しゅう しましょう。

(一) 友だち

まさおさんたちは、新しい 友だちを むかえて、どう
思ったでしょう。

新しい 友だちに、どんなに して あげたでしょう。

さだおさんの ことばを きいて、まさおさんたちは どう
思いましたか。

あなたの ことばずかいは どうですか。

ふぶきの 日、まさおさんは、よしこさんを どうして
あげたでしょう。

さだおさんを どうして あげたでしょう。

この 学校の せいどは なかよしですね。それは どんな
ところで わかるでしょう。

あなたも、友だちの ことを 文に 書きましょう。

(二) こくばん

あなたも、こくばんに いろいろな ことを 書きましょう。

○お知らせ

ひさしさんは どうしたのでしょう。

あなたは、この文を 読んで どう 思いますか。

○おねがい

あなたも、たのみたい ことが あったら 書きましょう。

○しらべたこと

文と 表とを みくらべて はなしあいましょう。

○ことばさがし

二十いじょうの どうぶつが かくれて います。
どんなに したら さがしやすいか 考えましょう。
鳥・魚・虫・けものなど いろいろ あります。
さがしにくいのは 次の ような ものでしょう
きつつき、ほおじろ、らいおん、かたつむり。

○さむい 朝

ふつうの おはなしに なおして みましょう。

○南の 友だちから

あなたも、友だちに 手紙を 書きましょう。
南と 北の 冬に ついて 話しあいましょう。

(三) なんてんの 実

ひとつひとつの 作文が、学校の なにを 書いている か
しらべましょう。
あなたの 学校と くらべて 話しあいましょう。
あなたも、学校の 作文を 書きましょう。
あなたたちも 文しゅうを 作りましょう。
文しゅうの 名まえを、なぜ「なんてんの 実」と
したのでしょう。

いろいろな　ものの　名まえを　書きだしましょう。

二　わたくしたちの　町

(一)　町や　村の　ようすを　考えながら、学しゅう　しましょう。

わたくしたちの　町

まさおさんたちの「わたくしたちの　町」は、どんな　じゅんじょで　作って　いったでしょう。

おもな　たてものを　書きだして　みましょう。

そこでは　どんな　おしごとを　して　いるか、話しあいましょう。

この文の　どちゅうで、ぎょうが　あけて　あるのは　なぜでしょう。

町や　村を　よくするために、どうしたら　よいか　話しあいをしましょう。その　ことを、文に　書いて　みましょう。

でんわ・ポスト・こうこくなどの　ように、ことばと　つながりの　あるものを　さがして　みましょう。

あなたも「わたくしたちの　町」に　名まえを　つけてください。こうえんにも　つけましょう。

道にも　つけましょう。

あなたの　町や　村の　名まえを　書きだしましょう。

いろいろな　名まえを　書きだしましょう。

山・川・橋・町・国　などの　名まえ。

(二)　町かど

何が　書いて　あるか　しらべましょう。

手紙は、どんなに　して、あいてに　とどくのでしょう。

道を　歩くには、どんな　ことに　気を　つけるか　話しあいましょう。

あなたたちが、あんしんして　くらす　ために、どんなに　なって　いるか　話しあいましょう。

かじやの　ところは、「トン　テン　カン」だけ　よむ　人と、その　ほかの　文を　よむ　人に　わけて　読んで　みましょう。

あなたも、町や　村の　ことを　文に　書きましょう。

(三)　みかん

おはなしが　できるように　読みましょう。

おもしろいと　思った　ところを　話しあいましょう。

みかんが　どんな　たびを　つづけて　くるか、考えて　みましょう。

あなたの　町や　村には、どんな　店が　ありますか。何を　うって　いますか。みんなで　話しあいましょう。

三　たのしい　日

学げい会・てんらん会「おとうさん　おかあさん　先生の　会」のことを　思いだしながら　学しゅう　しましょう。

(一)　たのしい　日

どんな「たのしい　日」が　書いて　ありますか。

あなたも、学げい会や　てんらん会の　ことを　話し　あったり、書いたりしましょう。

まさおさんの　おかあさんは、なぜ　早く　学校に　こられたのでしょう。

あなたも、学げい会の　ことを　文に　書きましょう。

おとうさんや　おかあさんを　おまねきする　手紙を　書きましょう。

プログラムなども、みんなの、手で　作るように　しましょう。

(二)　つくし

この歌を　あんしょう　しましょう。

どんな　ところを　おもしろいと　思い　ましたか。

あなたも　こんな　歌を　作って　みましょう。

この　歌の　つづきを　作って　みましょう。

つんつん、づくしが　おかから　よんだ。

「おきろ、おきろよ。草の　め　木の　め。

つんつん、つくつく、つくしの　声は、

おかも、なみ木も、うっすら　みどり。

(三)　春の　小鳥

あなたも　春の　小鳥に　なって、たのしく　しばいを　しましょう。

どんなに　したら　しばいが　できるか、しごとの　じゅんじょを　考えましょう。

だれが　何を　するか。どんな　ものが　いるか。まくの　あけしめを　どうするか。

どこに　だれが　立つか。どんなにならぶか。

などと、みんなで　話しあって　きめます。

あなたも　口が　よく　まわるように　しましょう。

ことばは　はぎれよく、はっきり　いいましょう。

早口　あそびも　して　みましょう。

ひきぬきにくい　くぎ。

子がもが　こごめ　かむ。かも、こめ　かむ。

くりの　木の　くぐり戸は、くぐるに　くぐりにくい　くぐり戸ですが、

くぐるに　くぐりなれると　くぐりやすい　くぐり戸です。

小鳥が　春を　しらせに　きました。

たのしく　三年に　なりましょう。

あたらしいことば

ページ

1
2
3
4 ふえました
5 はずかし(そう) ひっこし(て)
6 おじぎ あんない
7 使いましょう
8 ひどい
9 雪まみれ
10
11 入口 がいどう
12 かべ 自由
13 おみまい よろしく
14 かんたんけい おんど
15 表〜
16 字 かならず
17 はがき どうぶつ
18 すいせん いけない
19 なんてん ピン
20 ぼうしかけ とっく
21 げんかん 作文
かべしんぶん きちんと
とうばん

22 小屋 はらっ(て)
23 かざって かなあみ
24 きのう (光が)さして
25 しばられ(て) 学げい会
26 きゅうしょく 小人 しらべて
27 ねぎ にんじん
28 としょかん セロハン
29 とじ(て) 文しゅう
30 なかよく
31 どうぶつえん なぬめ
32 ならし(ました) あつ紙
33 たてる おか
34 ゆうびんきょく まっさき
35 えいがかん けいさつ
36 (のぼり)にくい こうえん
37 まん中 所
38 組わけ
39 ポスト 店
40 てつどう 町かど
41 わりばし
42 こな雪 日ぐれ
43 とまれ 子いぬ

とめ(て)
おたより
(北)がわ
べんきょう

ふんばっ(て)
ふじゅう
なかよく
(一)なんか(に)

44 夜ふけ じっと
45 そびえ(て) 火のみやぐら 四方
ねしずま(った)
46 ぐらい 仕事ば おこって
47 だんだん畑 船
48 くだった(り) 川しも はさみ
49 そろそろ もがれ(た)
えりわけ(られたり)
50 ひと所 つめられ(て) ろ
51 心もち たび
52 くだもの屋 思わず
53 ロ々 りんご よせあ(って)
54 なつみかん なれて
55 むっつり どっち
56 ひなまつり おまねき
57 おみえ(になりました)
58 ねっしん
59 つくし
60 春風
61
62 親鳥
63 山おく もり
64 おけいこ まく
65 よっといで

66 おに
67
68 やくそく
69 ならって
70 むずかしい がまん しげみ
71 とても
72 つまらない
73 よそう おぼえ(ても) かまわない
74 マント
75 きみたち
76 (きき)たがって すみれ
77
78
79 (いき)かけます(が) もど(って) くりかえし(て)
80 しまります。

新 (4)
話 (5)
京 (5)
元 (6)
使 (7)
自 (12)
由 (12)
寒 (14)
表 (14)
名 (15)
長 (19)
毎 (21)
屋 (22)
集 (25)
肉 (27)
食 (27)
家 (28)
何 (32)
駅 (33)
店 (36)
所 (36)
守 (44)
黒 (45)
仕 (46)
事 (46)
畑 (47)
重 (47)
船 (47)
送 (49)
心 (51)
首 (52)
育 (53)
歌 (59)

本書の中、執筆を依頼したものは、次の通りである。

春の小島　栗原一登

さし絵

関合正明　高橋庸男

浜野正義

そうてい

株式会社　光村原色版印刷所図案部

下　年　二　ごくしん

小国 217　友　だ　ち

昭和二十五年一月六日　印刷
昭和二十五年一月十日　発行

定価　三十九円五十戔

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE JAN. 6, 1950)

著作者　垣内松三
　　八木橋雄次郎

発行者　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
　　光村図書出版株式会社
　　代表者　大江恒吉

印刷者　東京都中央区銀座西六丁目二番地
　　株式会社　細川活版所
　　代表者　北川武之輔

発行所　東京都品川区東大崎一丁目五三二番地
　　光村図書出版株式会社

2

下

広島大学図書
0130449801

書出版株式会社

¥39.50